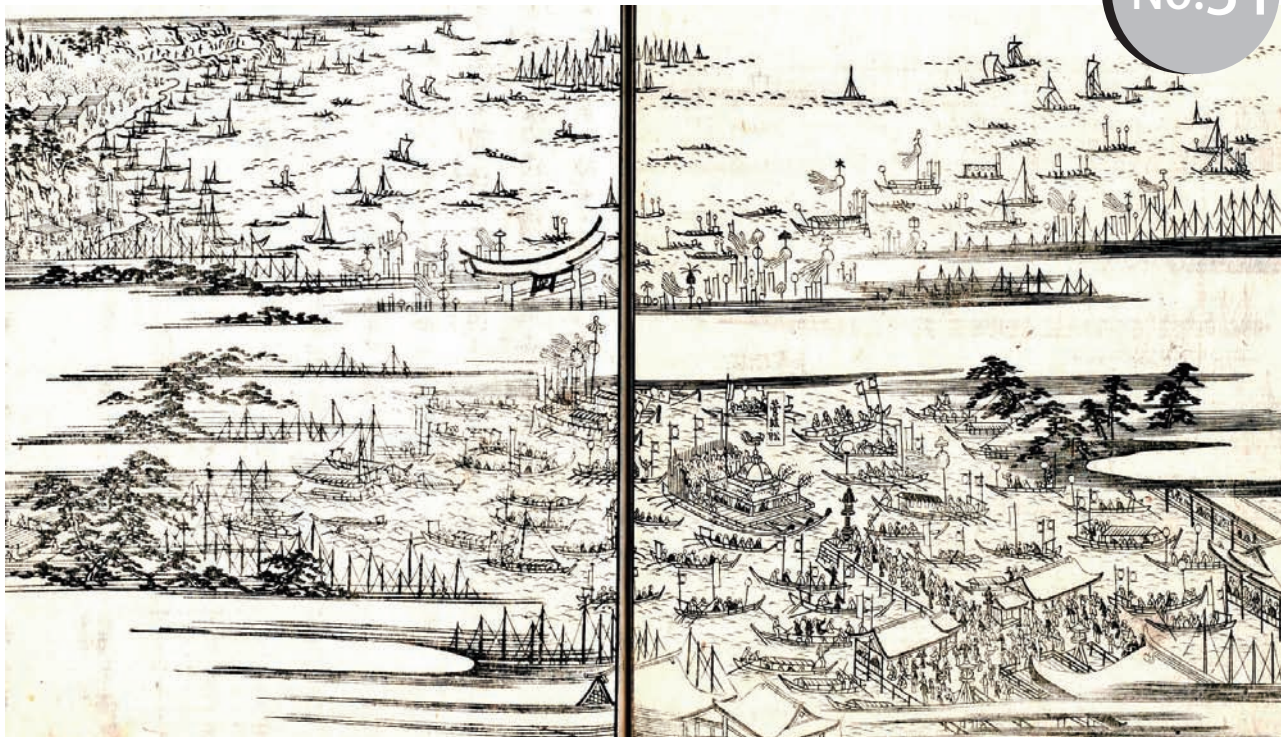


Let's Know Hiroshima Castle.

しろや！ 広島城

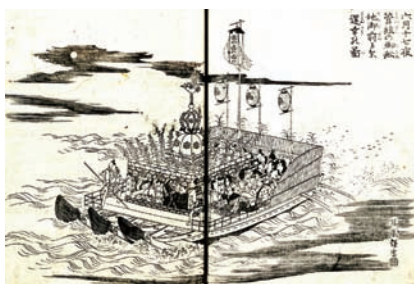


No.31



①「(六月十七夜管絃) 同夜海上光景 其二」

広島城下 町民パワー結集の“御供船”ってなに？



②「六月十七夜管絃の御船 (管絃船) 地御前より還幸の図」

さて、このパノラマに広がる絵図①の場所はどこかわかりますか？絵図の中央には海にそびえ立つ大鳥居が見え、その右下には羽を広げたような建物が垣間見え、そこへ大小の船が向かっていますね。ここは今年の大河ドラマ「平清盛」の舞台として活気づくゆかりの場所といえば・・・。

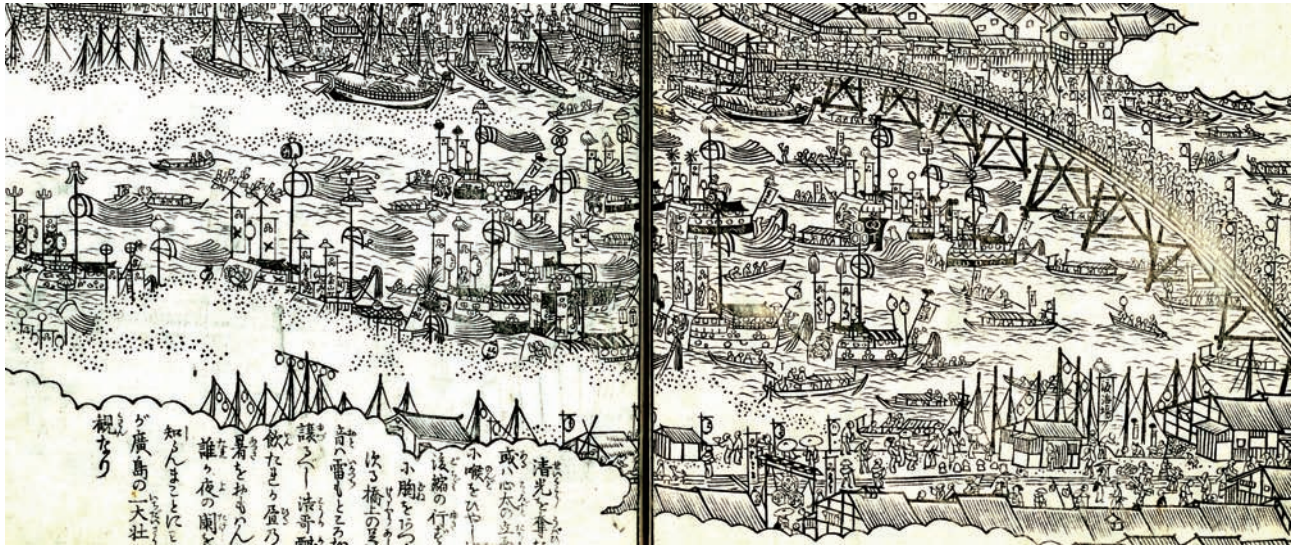
正解 は宮島の巖島神社です。あまりにカンタンでした？それでは絵図①～③の紹介をしましょう。これは天保13年(1842)刊行の『芸州巖島図会』(広島藩士岡田清編著、山野峻峰齋画 広島城蔵)という案内記に描かれた「管絃祭」の様子です。

管絃祭は平安時代、朝廷や社寺で行われていた管絃(雅楽演奏)の舟遊びを、宮島にて平清盛が船上で催したのが起源とされ、現在も毎年旧暦6月17日夕方から行われる巖島神社最大の祭礼です。

①は、絵図中央の小船3隻をつないだ管絃船②が深夜、客神社と回廊に囲まれた「枅形」へと渡航する様子です。管絃船の周りにはそれに随行する観覧船や、飾り立てた御供船③が海上を埋め尽くし、祭りのクライマックスを見届けています。



③「御供船川口を出る図」



④「六月十六夜広島本川口の図」

■「お供する」御供船

今回の注目は、前ページでも紹介した「御供船」という船です。「オトモブネ」「オトモンブネ」など呼びますが、管絃船にずっとお供する船なのです。単純明快ですね。

そもそもお供することになったのは、今から301年前の正徳元年（1711）、雨天を心配する厳島神社に頼まれて広島城下紙屋町の釣燈屋市兵衛が管絃船仕様のビッグサイズの油紙製雨がっぱを作り、それを載せた「雨具御用船」を出したことが始まりとされています（『知新集』）。市兵衛の製造に要した苦勞が酬いられ、以後は紙屋町の船のお供が許されることとなりました。ここから広島城下と御供船の関わりが始まりました。それは大変名誉なことであり、城下他町のあこがれの的となりました。「我が町でもぜひお供をしたい！」という熱烈な想いから享保年間（1716～1736）、「水主（船頭）の手代わりを準備する」を理由に、まずは紙屋町南隣の塩屋町が「御用御供船」を出すことになりました。しかし実際には肝心の「御用」はなく単なるお供する船だったようです。これに続けとばかりに、各町が理由をつけて「御供船」を出すようになり、管絃船にお供する船が年々増加し、管絃祭は宮島だけでなく城下を巻き込んだお楽しみの年中行事となっていくのです。

■16日&18日も胸弾む御供船

旧暦6月17日の管絃船にお供をする御供船は、広島城下の京橋川、猿猴川、平田屋川、元安川、本川などで組み立てられ、前日16日夕方に集結



⑤現在の本川橋（旧猫屋橋）

し夜半、川を下り出発し、宮島の有の浦を目指します。

『芸州厳島図会』の「六月十六夜広島本川口の図」④には、「まことにわが広島の一大壯観なり」とあり、最も出船数が多くにぎやかだった本川猫屋橋（現本川橋）付近の様子を描いています。白絹の吹貫がなびく御供船を遊覧船が囲み、兩岸、橋上にはひと目見ようと人々が集まっています。無数に立つ提灯のあかりで御供船はより神々しく輝き、人々の気分を高揚させたことでしょう。

翌17日の管絃祭当日、乗員は厳島神社に参拝後、沖に出て大鳥居を中心に漕ぎ回り、夕方、管絃船が対岸の地御前神社へ向かい、その後宮島の長浜神社へ戻るまでの間、管絃船の前後左右をずっとお供して渡海します。

管絃祭が終わると御供船は翌朝18日に広島へ戻ってきます。江波沖の河口では、酒食を載せた各町の出迎えの船が囃子を奏で手踊りで御供船を先導しそれぞれの川へ戻っていきます。この戻り船を見ようと遊覧船、見物人が出て16日と同様に大変なにぎわいだったようです（『自慢白鳥年中行事』）。



御供船（模型）のパーツ
欠損パーツと10本近くある細長い棒が、組み立てる私の頭を悩ませた。

⑥御供船（模型）

明治21年（1888）製作
京橋川で組み立てられた
御供船の模型。

船首の竜頭は珍しい。

広島市郷土資料館蔵



■美しすぎる御供船

当初は任務遂行がメインの御供船でしたが、各町は次第に京都祇園祭の山鉦の飾りを真似、三絃や笛・太鼓でコンコンチキチンの祇園囃子を奏でるかたちをベースに、豪華さと奇抜さを競うようになりました。川版広島祇園祭といったところでしょうか。

『芸州巖島図会』では御供船の装飾について「おおよそ二階屋形・舳屋形を作り、金銀をちりばめ珠玉をかざり、錦の上幕・綾の水幕、紅紫水上にひるがえり、燈花波間に漂う」とそのまばゆい姿を表しています。

また白島町では東西両地区が各1隻御供船を出し、殊に西町の船首には三番叟の人形を取り付け、時々これを操ったとあり、奇抜な飾りでアピールするなど御供船にかかる意気込みが感じられます（『自慢白島年中行事』）。

さて毎年豪華に飾り立てるとなると、たくさんのパーツが必要となり複雑になります。そのため模型を作り参考にしたのでした。しかしこの模型ですら30以上のパーツがあるのです。

今回筆者は、模型⑥の再現に二人掛かりで挑戦しました。残された絵図などを手がかりに組み立てたものの相当な集中力と根気を要しました。ちなみにこの模型の船底にはキャスターが付き、模型をゆっくりと移動できるように工夫されています。

この御供船の出船・戻り船を藩主やその一族もお忍びで、水主町の本川下流東岸の別邸（与楽園）などで観覧することもありました。これを

「御透覧」といい、この時には各御供船は本川に集まり整列をして敬意を表したということです。

嘉永5年（1852）6月15日夜には、京橋川に浮かぶ堀川町、京橋町、東引御堂町の御供船を見ようと集まった群衆で京橋が崩落し、死傷者も出て大惨事になるほどの想像を絶するにぎわいでした。

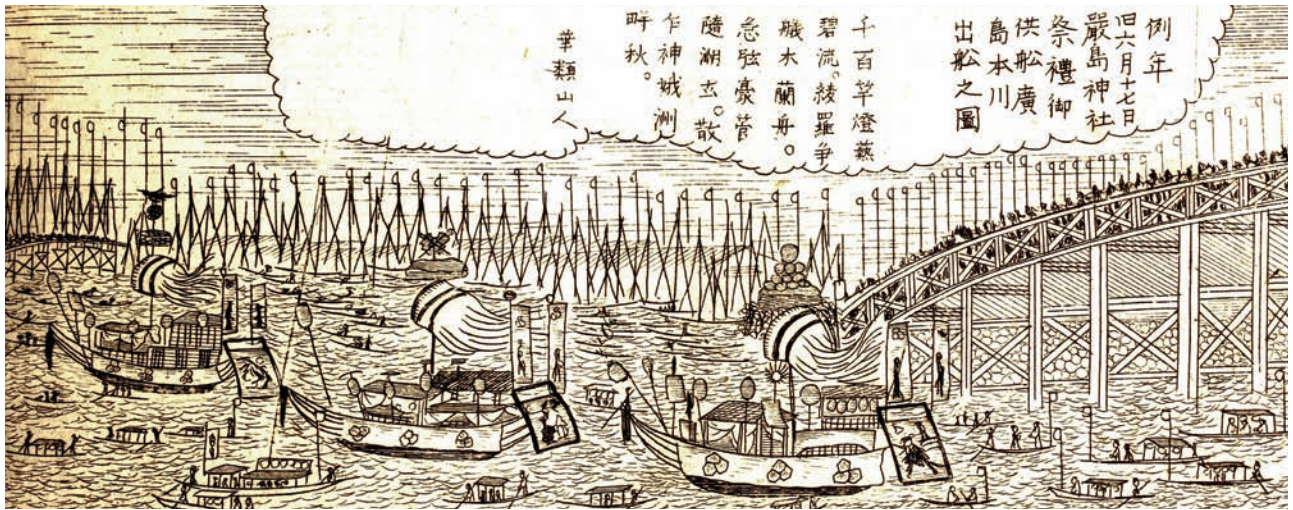
■窮地に立った御供船

御供船隆盛の要因は、産業・経済流通の要となる町人の財力でした。政治権力と結びつき武士層を圧倒する勢いにまで成長した裕福な商人も登場し、町の威信をかけて御供船の飾りへと贅を尽くす者もあったのでした。

町人の勢いとは裏腹に江戸時代の日本は天災地変が頻発し、諸藩は凶作による飢饉、災害復旧工事、幕府からの公役などの難渋から財政難に陥りました。幕府は社会の安定を図る回復策として儉約令を出し、奢侈（贅沢）を禁止しました。広島藩もそれに従い節約を強化し、娯楽や風俗を取締り、武士の家禄もカットするなど、藩内の緊縮財政に努めました。

そんなご時世の安永6年（1777）、藩主浅野重晟は与楽園にて、本川を行き交う豪華な御供船を観覧し、難色を示しました。そのため翌安永7年、藩は御供船の飾りが華美になることを禁止し、船飾りに関する制限を加え、さらに囃子も禁止となり次第に出船数も減り活気の薄れた管絃祭となっていきました（『広島市史第二巻』）。

これは藩の節約方針に沿っただけでなく、競争心が高ぶり、ますます華美な御供船を仕立て



⑦明治時代の御供船出船の様子 「厳島神社祭禮御供船広島本川出船之図」

町名の幟を立てた御供船3隻を見ようと水上、橋上に群衆が押し寄せている。高提灯が川筋や橋上に並ぶ姿は壮観。

『明治十年御届広島諸商仕入買物案内記并二名所調べ』より 広島市郷土資料館蔵

ることで重くなる町人の負担を軽減する狙いもありました。当時、藩が抑制できない程娯楽に飢えた人々の御供船への関心、期待度が高かったことがうかがえます。

その17年後の寛政7年(1795)、待ちに待った囃子の復活が許されると、90隻を超える御供船が出船し、その盛大な光景を見ようと遊覧船も復活し活気を取り戻したのです。

寛政12年(1800)には、京橋川に隣接する御泉水(現縮景園)にて前藩主重辰が御供船を観覧しました。宮島から戻った御供船は、京橋川河口に集結し、御泉水まで京橋川を上って敬意を表しました。重辰といえば華美な御供船に制限を加えた当事者であったものの、この頃になると御供船に対して寛容になり、藩の娯楽への意識の変化を見ることができます。

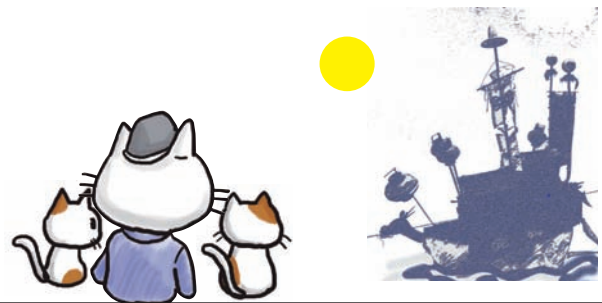
天保6年(1835)は、新藩主齊肅の襲封後初めての広島へのお国入りで奉祝ムードの中、齊肅が与楽園にて出船・戻り船を観覧しました。「御供船の行列も美粧を凝らし、殊に鉦鼓管絃の音曲を入れ、例年よりも殷賑を極む」(『広島市史第

三巻』)とあり、御供船の存在を認め、城下をあげて例年以上ににぎわったことがうかがえます。

■明治以降の御供船

明治時代になると、広島各川に架橋が進んで橋下が低くなり、飾り立てた御供船の通過が困難となり、次第に管絃祭にあわせて各川で組み立てられるのみとなりました。昭和初期までは京橋川、本川に存在したようで、薄田太郎は明治から昭和中期の思い出を語った『がんす横丁』で「浮城のようなこの船の美しさ」と、忘れることのできない豪華な行事であったと語っています。「水の都ひろしま」らしい町民パワーのシンボルだった御供船も今は昔、管絃祭と広島城下とのつながりが忘れられかけているのは残念なことです。

(山縣紀子)



しろうや
!
広島城

編集・発行

財団法人広島市未来都市創造財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519

平成24年3月14日発行

広島城利用案内

開館時間：9:00～18:00
(12月～2月の平日は9:00～17:00)
入館の受付は閉館の30分前まで

入館料：大人360円(280円)
小人180円(100円)
()内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～1月2日

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>



携帯サイト

「しろうや!広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます